

教育講演 対談

第6回神戸看護学会学術集会

テーマ：まちの減災ナース指導者制度の展望

Prospects for the Community's Mitigation Nurse Leadership System

小原 真理子¹⁾

Mariko Ohara

南 裕子²⁾

Hiroko Minami

1. まちの減災ナース指導者養成 認証制度の歴史と展望 (南裕子先生)

1) 日本災害看護学会の事業とまちの減災ナース指導者

私は日本災害看護学会の前副理事長として認証制度委員会を担当していましたので、その立場から今日はお話し致します。先ほど小原先生から、素晴らしいまちの減災ナース指導者研修制度のことについてお話がありました。また、その背景と、アウトカムとしての修了生たちのお話があって、とても感動しました。

日本災害看護学会は他の学会と少し違い、発足当時から実践の体系化というものに大変こだわってきました。定款の第3条、目的には、「災害看護学の知識や実践の体系化をはかり、災害看護学の発展を通して、人々の生活と健康に寄与することを目的とする」と記載されています。また、第4条の事業のひとつとして「被災地における看護活動」があり、きちんと看護実践活動が学会の定款に書かれてあるというところが特徴ではないかと思います。

日本災害看護学会では、実践の体系化を推進するためにさまざまな活動があります。具体的な例として、災害直後から被災地に派遣される先遣隊という人々です。この人たちは災害看護のエキスパートです。地域の中の全く知らない所に入って行って直ちに活動ができるという能力を持った方々で、全国各地でも、発災したときにその日のうちに出発して、現地に向かうという方です。小原先生は最初から先

遣隊の一員でいらっしゃいます。今は15名が登録されていると思います。

それから、ネットワーク活動調査調整部というところがあります。日常的に災害が起こっていることをウォッチングしていき、そして発災した後は、先遣隊の後で初動調査等を行う仕組みがあります。先遣隊はその日のうちに出て行って、後発隊や理事長、副理事長、また、ネットワーク活動の理事に連絡を取って情報を流します。ネットワーク活動の初期調査では、本部担当者と、東日本担当者、西日本担当者がおり、このメンバーは初期調査として、ある一定以上の災害が発生すると、発災すると自動的に、その月の担当者がいますので、その月の担当者がいろいろなネットワークを使って情報を集めてきて、その情報を学会の理事や委員会委員と共有していきます。初動調査というものがありまして、先遣隊が帰ってきて、発災して大体1カ月後辺りから、チームを組んで被災地でネットワークのカウンターパートになれる組織等を見つけて、そこに向けて現地調査に行きます。発災後初期のところの被害状況等を調査して、それを報告するという役割を担っています。また、中期的な結果、発災後の経過の報告も行われています。それも報告書が出て、学会誌に必ず出ていますし、理事には理事会のたびに活動が報告されます。

それに加えて新しく設けたのが、「まちの減災ナース指導者」の認定制度です。

まちの減災ナース指導者は、基本的にまちの減災

1) 清泉女学院大学国際・災害看護学領域 教授 Seisen Jyogakuin College, International & Disaster Nursing Area

2) 神戸市看護大学 学長 President of Kobe City College of Nursing

ナースを育てる人たちです。自分も活動しますが、まちの減災ナースを育てていくので、研修会では小原先生が指導者をどう育てていくかのお話をされましたが、指導者がまず自分で活動してみて、まちの減災ナースに何を指導しなければならないのか、地元の特徴は何なのかということを見定めて、まちの減災ナースのプログラムをつくっていくことになります。したがって、非常に重要な役割を担っています。まだ発災していない時から地域とのつながり、組織、また地元のつながりの中でネットワークを組んでいって、活動していきます。発災したときはその人が所属している組織でまずは優先的に仕事をしなければいけません、でも、もし可能であれば、最初の72時間もしくはそれ以上の間は、災害支援ナースやその他の支援者が来れないことが多いので、現地にいる人たちが、自分たちで頑張らなくてはならないということがあります。従って、その間に顔見知りの「まちの減災ナース指導者」が、またはその人たちによって育てられたまちの減災ナースが現地で、地元でいろいろな活動をしていくということが出来る体制を整えるという意味なのです。

2) まちの減災ナース指導者の認定

まちの減災ナース指導者の認定とはどういうことかという、小原先生が先ほどお話くださったように、特定の研修を修めた人たちが審査を受けて、日本災害看護学会に登録することになります。認定のプロセスをもう少し詳しくいうと、日本災害看護学会の理事会のもとに認定制度委員会があります。その委員会が認定審査と認定登録を行います。この委員会は、それは研修を担当する委員会とは異なります。研修を受けた看護師たちは、最終審査の試験を受けて、合格した人が手続きを踏んで認定を受け認定書を受領します。日本災害看護学会では、認定された看護師を「まちの減災ナース指導者」として登録します。

認定された「まちの減災ナース指導者」は、自分の地元（地域や病院など組織）で研修会を開いて、「まちの減災ナース」を育てることが期待されています。また、平常時には関係機関と連携を取りながら、いざというときに「顔のわかる関係」を築くための活動を行うことが期待されています。この資格は更新制度もあって、上記の活動の継続が評価されます。今のところは、日本災害看護学会が行っているまち

の減災ナース指導者研修会を受けた人たちへの認定ですが、研修会は年に2-3回しか開催できないので、これでは全国をカバーしきれないのです。

指導者が増えないとまちの減災ナースは育っていかないわけです。それで、CNSや、DNGLの修了生や、災害看護のエキスパートで、もう既にこういう能力がある一定持っていらっしゃる方がいらっしゃる、その人たちも認定が受けられるように体制を整える必要があります。

これからの課題は、いかにまちの減災ナース指導者を増やすか、この指導者がまちの減災ナースをどのように育てていくのかです。しかし、CNSやDNGL修了生はまだ数が少ないし、災害看護のエキスパートをどのように認めていくかです。例えば、大学で災害看護学を教えていらっしゃる教員たちが候補に挙がっています。または、災害看護と近接領域を研究したり、実際にDMATなど、いろいろな仕組みの中で現地に入って行って災害の状況が分かり、活動した経験のある人たちがここに含まれていくのかということが今後の課題です。何より大事なものは、まちの減災ナース指導者と、その人たちによって指導されたまちの減災ナースが地元のレジリエンスをどう支えていくのかです。私からいえば、地元創成看護学にとって非常に重要な知識体系にもなっていくし、ネットワーク体制にもなっていくと考えています。

2. 対談（小原真理子先生 南裕子先生）

■南：この制度を発足してきた辺りの思いというものをまず、小原先生からお伺いできたらと思います。

小原：2017年から、まちの減災ナースに行き着くまでに、私は教育活動委員会の理事を長らく任っていました。その中で何かしらの制度をつくるということを南先生が学会の理事会でおっしゃいました。それにヒントを得まして、どのような制度のナースをつくれるのかということは何回か提案しましたが、理事会ではことごとく却下されました。最終的に「まちの減災ナース」ということを理事会のほうに申し出た時に、南先生が「それは面白いのではないのでしょうか」と言ってくださいました。そして、それとともに、その人たちを、何百人、何千人もつくるのは大変なので

指導者をつくりましょうという提案をいただきました。私はその時、指導者をつくるという事に抵抗がありましたが、実際に今まで3期生の指導者を修了させてきて、この方法で良かったと本当に思っています。そういう意味で、南先生を始め、理事会の方々からいろいろコメントをいただきながら、あとエールもいただきながらここまでやってこれたと、私も感慨深いところです。

■南：本当にそうですね。理事会のあの場面が思い出されます。いろいろな地域で、地元を守り、人々の暮らしと命を守り、また、地域が力をつけていく、看護職が力をつけていくということに対して、小原先生はいつも揺るぎない信念をお持ちだと理事会の中で思っていました。先生を突き動かしている、これがぜひ必要なのだという思いは、長い間の経験なのでしょうか。経験を通して分かってきたことなのでしょうか。

小原：そうですね。私も長らくいろいろな活動をしてきました。その中で、海外では難民キャンプ、そして教育や臨床以外にも地域防災活動に取り組んできました。私は武蔵野市のほうに住んでいました。そこで地域防災を立ち上げた経験知があります。そして、そのように至ったことには、元々難民キャンプで働いたことがすごく影響があるのかなと思っっています。施設の中だけではない、地域の中で看護師が活動できる範囲はもっとあるのではないかと思っていましたので、地元で立ち上げた経験知は、今回のまちの減災ナースを育成することには大変役立っているのではないかと思っています。

■南：先生の研修会で、実際にご指導くださっている先生方は何人ぐらいいらっしゃるのでしょうか。具体的な教育の体制のようなものを教えてください。

小原：委員会は今まで4人体制でした。研修制度のプログラムを作り、それから、プログラムをするにあたっての資料作りや、そして、それを皆さんに配布したりなどです。また講師の先生がプログラムに必要なときは、どのよう

な講師の先生を今回はお招きしたらいいか、シミュレーションはどのようにしたらいいかというところも工夫しました。今まで3期生まで指導者養成に取り組んできましたが、3期生ぐらいになって、やっと手応えがあるようになってきたなというのが私の中にあります。それは4人体制で、皆さんそれぞれの強みがあったことでやってこれたのではないかと思っています。

あと、途中で南先生と酒井理事長さんたちが研修生の演習発表会に参加してくださいました。あれも大きな力でした。皆さんに大変力があると認めていただいて、受講生さんたちにエールをくださいました。あれは結構、受講生さんだけではなく、私たち委員にとっても大変大きな力になったのではないかと思っています。

■南：小原先生の講演のなかに4人の修了生が発表なさいましたが、私は本当に感動しました。今までにない働き方ができる看護師が育ってきました。本当に地元へ食い込んでいくことができる人たちです。そして、自分の力で結果的に開発していきますよね。あれはもう看護職の力を改めて認識しました。でも、それは誰でもできるということではなく、やはりある程度の研修の機会と、実際に何回も演習して行って、それを持ち込んできて発表したりするという課題があって、その課題を自分の地元へ持ち帰ってきてこなしていくという研修制度そのものも、5時間掛ける3回、それから30時間の演習というあの制度でこれだけの方がこのように育つのだと、私は本当に感動しました。あれは本当に先生方のお力と、実際に学ばれた方々の、そして、実際に現場で頑張っている減災ナース指導者のお力によるものだと思います。本当にいいお仕事をなさっていると思います。

小原：そうですね。手作り感があって、受講生と共に双方で作り上げていったというのはすごく感じます。皆さん、若い方よりも、割と中年世代の方が多いです。それは、臨床経験や大学での教育をやっていた方が多くみられます。なぜ受講したのですかと聞くと、「自分の中

に地域の中で活動したい、こういう研修をしたかったのです」という方が何人かいます。そういう思考は、看護師さんの中には絶対にあるのではないかと思います。そのような動機が、地域の中でフィールドワークをすることとすごくフィットしたのかなと思います。最初は、地域活動の経験がないので抵抗感があった方もいたかと思います。しかし、皆さん、どうやったら市の防災課の人たちと渡りをつけられるかなどといった質問に対し、こちらでシミュレーションする等、もういろいろなことをやってきました。研修生の皆さんには、そのようにやれば通じるという手応えがあったと思います。そういったことが次への、先輩から後輩にということでもんもん発表してもらったので、やはりそういうことが伝わっていたのではないかと思います。

■南：そうですね。訪問看護で活躍されてる修了生のお話もありました。訪問看護は地域とつながっていきます。私は、類似した看護界のシステムとしては、まちの保健室だと思います。まちの保健室は協会を中心にしてやっているけれども、各大学やいろいろな組織がまちの保健室を広げていっています。まちの保健室をつくった時も実は、その仕事は保健師の仕事であって、臨床看護師の仕事ではないのではないかというクレームが日本看護協会に来たことがあります。それで、そういうことではありませんと説明したことを今思い出しました。小原先生も保健師との違いということをお話しされていました。その辺りはいかがですか。

小原：そうですね。保健師さんもこの講習に出られるとまた違ってくるのではないかなと思うことはあります。保健師さんとの違いというのは、看護師のほうが全体的に見る力というのがなかなか持てなかったところなんです。しかし、この研修によって、このようにすればつながり、見られるようになるということがある程度獲得できます。あとは、その方法論としては、割ときめ細かく自分たちが入っているのではないかというところを感じ取っています。それはフィールドワークをしながら

です。発表した4人の方たちの計画や、実際の活動に進化していったのではないかと思います。

■南：今やっている、まちの減災ナース指導者養成制度というのはボランティアなものが非常にありますよね。

小原：そうですね。2足、3足のわらじを履いてやるしかないですよ。

南：そうですね。そこが特徴ですよ。減災ナースの仕事に非常に意味があるとなれば、例えば普通の看護教育の中や、卒後研修の中や、いろいろなところに入って行ってプログラム化されるようになってくると、こういう思考も臨床ナースに広がるのではないのでしょうか。

■南：ある発表で、消防署の中できちんと認証されたという方がおられましたよね。消防士さんたちの中で。

小原：消防団のですね。消防団に入って活動することが割とこの制度に合っています。というのは、やはり行政さんとだけだと、行政的なことよりは、実動の部隊のほうがいいということですね。

■南：地区防災の座談会でいろいろな人と一緒に話をした時に、地区防災仕組みの中に看護師がほとんどいません。看護師さんは忙し過ぎて。もし看護師さんが地区防災のところに名前を登録してくれて、行事の時に少し助けてくれたりしたらすごくありがたいということでした。私は、これはまちの減災ナース指導者、または減災ナースそのものが役に立つのだなど。とにかく看護師というのは社会で信頼されている職業だし、看護師さんがそこにいらっしゃるというだけで何となく相談に行かれるような気になるという地域もあると思うので、常に活発に活動できなくても、地区防災でつながって活動していく減災ナースが登録されているとなると、地区防災もすごく充実していくのではないかなと思いましたが、どうでしょうか。

小原：そうですね。今までの受講生さんの中には、

市から、登録制のようなものに結び付いた人たちもいます。それは、自分はこのことをやっていますよということを市の防災課などに働き掛けて、それが市長さんなどにつなげていくと現実のものになっていくのでしょうか。予算化に繋がったり。やはり元は自分です。自分がどう動くかです。そのために、そのきっかけは、研修の時のフィールドワークです。それがつながっていくきっかけになると思っています。でも、これも個人差があります。どのようにしたら背中を押していけるような仕組みを修了生たちに提供できるか、何かをやっていかなければ、とは思っています。

■南：そうですね。きっと勇気がある行動だと思います。自分の地元にある消防団のところに、私は看護師で、減災ナースで、こういうことを勉強しているのですが、皆さんに少しお近づきになりたいなどと言って行くということ自体も本当に勇気が要りますよね。でも、私は看護師ですが、と言ったら全然、やはりインパクトがあるのではないのでしょうか。看護師だから受け入れてもらえるところがあるのではないのでしょうか。

小原：きっかけはやはり市です。市役所のところへ行って、このような自主防災組織がどこにあるか、あるいは消防団という情報を取って、そしてつなげてもらうということをしてしながらすすめると、割と入っていくチャンスがありますので。少しの勇気ですよね。そのように大きな勇気でなくても入っていけるのではないのでしょうか。

■南：研修で、「実習で地元に入って行かないとならないから行く」ということが、やれる後押しになるのですよね。

小原：そうですね。そのように難しくなく、求めよ、さらば与えられんという感じでアタックすると応えてくれることだと思います。

南：虎穴に入らずんば虎児を得ずですね。

小原：そうですね。それは割と感じているみたいです。それに、声を掛けたら、向こうのほうも待っていましたとばかり、そのような制度が

あるのだったらぜひということもありますし、そのようなものはあまり聞いたことがないなど、いろいろ反応はあったようです。

■南：先生はずっと、災害看護のCNSを育てていらっしゃったのですが、そのCNSのプログラムの中に、例えばこういうプログラムが入るという可能性はあるのでしょうか。

小原：日看大の時、実習の中に地域防災という実習プログラムは作っていました。ちょうど武蔵野でやっていた時だったので、そこにCNSの院生さんたちは参加していました。今、そのCNSの何人かは、地域の中での活動や、あとNPOを立ち上げたりとかしています。

南：なるほど。私はぜひ、CNSのプログラムにこのプログラムの一部が入ったら、後で認定していくのにしやすくなるかな、など思ったりします。

小原：そうですね。

南：それと、災害看護のCNSだけではなくて、地元に入り込んでいくという手法を身に付けるためにも、他の分野のCNSにとっても、大学院生にとっても、こういうプログラムが拡大型であればいいですね。そのためにも教員にはぜひ指導者の認定をしてもらいたいと思います。資格を持っていたら、共通のものが増えてきますから。

■南：先生がやっていたら、修了生たちのフォローアップというものがありますね。フォローアップ研修を、学会がつくっていくというよりは、何らかの手だてでどこかが自分たちでやるか、または、何かの仕掛けがあったらいいかなと考えます。先生はどう思っていたらっしゃいますか。

小原：やはり修了生さん同士の同窓会のようなものをつくっていかないと、切れてしまうという場合があります。一回だけは委員会がプログラムしてきました。この間、2期生は、もう自分たちでこれからは続けないと、3名が、今年度は自分たちが当番をしますと申し出てくださいました。1回目のフォローアップ研修の時にそのような方向に持っていくことは必要です。

南：25人ほどなので、一つのZoomの画面の中で

も会えますものね。ミーティングができて、ディスカッションなどもできます。

小原：そうですね。やはり年に何回か会っていかないと切れてしまいます。今はこのようにZoomがあるので、いろいろなことをきっかけに会うことはできると思います。

■南：この制度の一番大きなこれからの課題は、どのように指導者の認定を受ける人を増やすか、そして、認定した人が減災ナースを増やしていくかというところが課題ですね。これから学会が取り組み、また、看護界全体で取り組まなければいけないと思いますが、先生、何かお考えはありますか。どうしたら増えていくのでしょうか。

小原：そうですね。先生はこの間、ショートカットの研修とおっしゃっていました。その対象者というのはCNSであったり、DNGLの学生さんなどです。そういう意味で、その人たちがターゲットの一つになると思います。あと、私は災害看護支援機構というNPOを持っているので、その人たちもいろいろなキャリアを積んでいるので対象になると思っています。皆が皆、5日間コースに入るというだけでなく、ショートカットの方法も検討してゆきたいと考えています。

■南：そうですね。本当に数的に言えば、私は、何万人、何10万人の制度にかなければいけないという感じがします。既存の教育過程の中に組み込ませることか、取り込んでいくことか、そういう活動を学生の時に指導者にはなれないけれども、減災ナースになれるように取り込んでいくか、広げていく道が。

小原：そうですね。私が所属している清泉女学院大学は、災害看護学のカリキュラムの時間数が120時間と大変多くプログラムされています。それは日看大の教育経験知が基になっています。4年生に統合実習というものがあります。来年、地域防災、減災実習を取り入れます。時間数は、4日間ぐらいしかありませんが、そこに当てます。基礎教育の中でできる範囲でやっていくようにはしています。シミュレーションだけではなくて、やはり現場

に出てもらうことはすごく効果があるかなと思います。

南：そうですね。学部の教育の中で選択で、または統合カリキュラムの最後にとという形で、いろいろな手法で学生の時から減災ナースの認定を、大学にいる間に取っておくというのはありかもしれませんね。指導者は教員たちでしようけれども。

小原：減災ナースを考えています。

南：そのようにしたら、減災ナースの思考が町の、地域のレジリエンスを高めていけます。SDGsでもあるし、地元創成看護でもあるし、非常に広がりがあるものなのではないかと思っています。

■南：私は小原先生の活動と情熱、パッションには敬意を表して、応援団に徹して、何かできることがあれば、やれたらといつも思っています。先遣隊としても、また、まちの減災ナース指導者の育成についても、これからもいろいろご指導いただいて、学会全体で、または看護界でも広く、地域レジリエンスを支える仕組み作りにきっと貢献されるのではないかと思います。

小原：南先生には本当に長い間、もう発足当時から学会の中でずっとご指導いただいて、いつもこのような新しい仕組みなどを提案していただいたり、サポートしていただいたり、それでここまで来たということはすごく思っていますので、本当に感謝しています。

■参加者への一言メッセージ

小原：今日はこの学会にお招きいただき、ありがとうございました。直接対面できなくて残念です。若い方々などがたくさん見ていらっしゃるのではないかと思います。看護の活動現場というものは施設内だけではなくて、今は広がった時代だと思います。そういう意味で、災害看護という中では、やはり地域というものは大変重要なポイントになると思いますので、皆さんもぜひ地域の減災ナースということに関与していただけたら、大変うれしく思います。

南：今回の神戸看護学会は、地域のレジリエンス

を支えるというテーマで開かれていることに大変敬意を表したいと思います。また、そのところで、ほとんどもう小原先生が頑張っておられた道でしたが、応援団の一人として呼んでいただき、こういう機会を与えていただきましたことを感謝します。私は、看護界で大事なものは、看護のお仕事自体もすごく大事だし、皆さんはそれが教育であり、または現場であっても大事なお仕事なのだと思います。しかし、その看護職が少しボランティアマインドを持って日頃から生活していきます

と、例えば隣近所のことや、住んでいる地元のところ少し視野を広げて、自分がマンションにいたら、マンションの管理の会などがあるし、自治体の訓練があるし、いろいろなことがあるので、少し心を広げていくと、私もやれていませんが、でも、そうしたらこの国は豊かになっていくのではないかなと思っています。その中の大事な始まりの一つが、まちの減災ナースだと思います。今日は機会をいただき、ありがとうございました。